**第１班 A**

# 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究

## (1)　共同研究員名

研究班代表：ジョン・ボチャラリ
共同研究者：クリスチャン・ラットクリフ
研究協力者：何彬　君康道　徐東千　中井真木　李利

## (2)　研究目的

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』全５巻のうち、21 世紀 COE プログラムにおいて Vol. 1/Vol. 2 を、センター第一期共同研究において Vol. 3 を刊行した。本研究の目的は、３年後を目途に、完訳版全５巻を刊行することである。これをとおして、海外において、歴史・民俗学・人類学・文学など、様々な分野の方々が日本の「常民生活」のあり様を参考にしてくれることを期待している。

## (3)　活動経過

○目的達成のための方法

21 世紀 COE の研究成果を継承・発展させることを目的とした本センターの第二期（2011-2013 年度）事業の共同研究の再編にあたり、〈図像〉資料研究として、本『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』に加えて、新たに『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編、『ヨーロッパ近代生活絵引』を設置した。前者は、21 世紀 COE で取り組んだ『日本近世生活絵引』北海道編、同北陸編、同東海道編を引き継ぎ、当初は南西諸島編として構想され、後者は、『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編として刊行してきた外国地域版絵引編纂事業の方法論をヨーロッパ地域に応用するものとして構想されたものである。そして、〈図像〉資料研究は、本センター共同研究の基幹的位置づけにあるとの観点から、この３つの絵引編纂協同研究を「生活絵引編纂共同研究」として統合し、全体の統括にセンター長（田上繁）が当たることとなった。

研究班は、21 世紀 COE から本センターの第一期事業を牽引してきた福田アジオの退任にともない、第二期以後は、ジョン・ボチャラリ、クリスチャン・ラットクリフを研究員とし、君康道、何彬、中井真木、李利、徐東千の各氏に研究協力をお願いしてきた。

○各年度の研究・調査経過

第３巻の編纂の見通しが付いた2010年度（第一期の３年目）の夏には、残り４巻と５巻の編纂準備に入り、まず分量が多い本文の英語訳を若手研究者が着手した。その結果、第三期事業終了までにそれぞれの翻訳が行われ、編纂の検討原案として翻訳稿が蓄積されている。第４巻については、ボチャラリ、君康道により、第３巻までの編集経験にもとづく研究班の本格的な検討がほぼ完了したが、第５巻についての英語版監修、および両巻の中国語、韓国語への翻訳が未了となっている。

○成果の公開状況等

上記のような研究・調査経過にあることから、第４巻、第５巻の編集刊行は、第三期以降に繰り延べされることとなっている。

## (4)　研究成果（成果物、獲得された知見、収集資料の解題等）

〈図像〉資料研究は、本センターの研究事業の柱の一つとして位置づけられ、生活絵引の編纂（図像から情報を引き出す絵引という方法）により、その方式の世界的な可能性を追求することが、本共同研究班の役割となっている。具体的には、『絵巻物による日本常民生活絵引』全５巻の絵引本文を英語化すること、そしてキャプションをマルチ言語版（英語、中国語、韓国語）として編纂することである。しかし、第一期事業の総括にあるとおり、日本中世という、ある文化のある時代の事物、事象を把握し、それを別の文化の脈絡のなかで理解できるように表現することは大変難しいことであり、一つ一つの事項の日本語の意味を確認し、それに対応する各言語の表現を探し出し、確定する必要がある。英語や中国語、韓国語で表現するためにも膨大な時間が費やされるであろうことは容易に想像できる。世に出ている各種言語辞（事）典の単なる適用にとどまらない歴史・民俗・絵画資料研究等の知見をふまえた成果が本編纂事業に蓄積されている。

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行の意義が、以下の諸点にあるとの位置づけは不変である（第一期事業の総括より再掲）。

第一に、絵引編纂という、日本で考えられた独創的な方式を世界に示し、世界的な規模で絵引の可能性を考えて貰うための検討材料を提供したことである。日本語としては『絵巻物による日本常民生活絵引』が刊行され、多くの研究者が座右において、それに親しみ、また恩恵を受けている。しかし、日本語を解さない研究者には、『絵巻物による日本常民生活絵引』を手にしてもその独特の方式を理解することはできないであろう。『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』を手にすることではじめて絵引という方式を理解できることになる。辞書編纂のために絵を描き、その絵に描いた事項や部分について単語を示すという図解方式は欧米でも古くから行われている。しかしそれらは辞書編纂のために必要な事項を新たに描いて、単語を示すものである。それに対して、絵引は過去に特定の文化のなかで描かれた絵画から特定の時代の特定の生活事象を引き出すものである。文書・記録のような文字資料から情報を獲得することは歴史研究の常識であるが、絵引は図像資料から情報を引き出すものであり、この世界に類をみない独創的な方式を世界に示すことが『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の最大の使命である。

第二には、日本中世の生活文化を、日本研究者を超えて、広く理解できるように示したことである。日本語を解する研究者であれば、『絵巻物による日本常民生活絵引』をひもとくことでそれは果たせる。しかし、日本の生活文化に興味関心があるにもかかわらず、日本語を理解できない人々には、その意味するところは全く理解できない。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』によって、はじめてそれらの人々が日本中世の生活文化を具体的に理解することができるようになる。十分に検討した結果として記されている本文とキャプションを読むことで、日本史上の事項について、日本語を知らなくても適切に理解できるようになる。

第三に、日本語と各言語が対照できるマルチ言語版を刊行したことで、生活文化に関する比較研究の材料を提供できたことである。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』に収録された日本語、英語、中国語、韓国語の対比的記載は、日本の事象を理解するための措置であるが、それぞれの言語においてそれに対応する事物を引き出すことで、言語的に対照するだけでなく、具体的な事物を対照させることができる。そのためには、言うまでもなく、それぞれの言語によるその文化を対象とした生活絵引を編纂することが必要である。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂は、世界の様々な文化についての絵引が編纂されることを期待して、その呼び水の役割を果たすものである。近い将来、東アジアの諸地域において、あるいはヨーロッパにおいて、それぞれの文化が蓄積している図像資料を対象にした絵引が編纂されることを期待したい。それが可能かどうかを編纂をとおして検討し、絵引という方式の普遍性を確認するための第一歩がこのマルチ言語版といえる。

## (5)　今後の課題と展望（自己点検・評価）

第４巻、第５巻の編纂事業に引き続き取り組むことが課題であるが、全巻にわたり気になっていることは、そもそも英語にない事物――烏帽子、長押などの類――をどうするかということである。その都度その都度説明するのは煩雑なので、一括全巻共通の Glossary を作ることにしているが、その作業はこれからである。

第１班Ｂ

# 『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編　編纂共同研究

## (1)　共同研究員名

研究班代表：小熊誠

共同研究者：渡辺美季

研究協力者：川野和昭　田名真之　得能壽美　富澤達三　豊見山和行　真栄平房昭　本村育恵

## (2)　研究目的

「南島雑話」以前の近世奄美の習俗を描いた絵巻「琉球嶌真景」、琉球本島関係では「琉球進貢船図屏風」、そして八重山の「八重山蔵元絵師画稿」を対象として、近世琉球地域における風俗絵図を研究し、その絵引を作成する。

## (3)　活動経過

①　2011 年度は、本研究会の初年度であり、まず「八重山蔵元絵師画稿」の絵引作成を目標とし、4 月 27 日に打ち合わせをした。第 1 回研究会を 6 月 6 日に開き、元八重山博物館学芸員であった得能氏を中心に絵引作業の分担を決め、絵引研究専門家である富澤氏を中心に絵引作成の書式を検討した。第 2 回研究会を 8 月 17 日に開き、各自の分担部分を持ち寄って検討した。第 3 回研究会を 2012 年 1 月 31 日に開催し、各自が作成してきた絵引資料について検討を行った。2 月 21 日に第 4 回研究会を開催し、さらに各自の絵引資料を検討し、不明な点を明確にすることとした。また、渡辺、得能、富澤の 3 名で、2 月 24 日から 27 日の日程で石垣調査を行った。

②　2012 年度は、「那覇港図屏風」を取り上げ、そこに描かれた那覇および首里の歴史や民俗に関する絵引を作成した。研究協力者として、琉球史研究家であり、「那覇港図屏風」などに詳しい神戸女学院大学真栄平房昭教授と琉球大学豊見山和行教授に新たに加わっていただいた。2013 年 2 月 27 日から「八重山蔵元絵師画稿」の原稿を持ち寄って、確認作業を行った。「琉球進貢船図屏風」の分担を決める研究会は、3 月 4 日から 5 日に行った。さらに、2013 年 3 月 28 日から 31 日まで、得能氏と富澤氏によって沖縄の浦添市美術館で「琉球進貢船図屏風」の調査、名護博物館で「琉球嶌真景」の調査を行った。

③　2013 年度は、8 月 17 日から 19 日に研究会を開催した。17 日は、「八重山蔵元絵師画稿」の原稿を確認した。18 日は、「琉球進貢船図屏風」の切り分けを検討し、19 日はそれに基づいて担当を確

認した。「琉球嶌真景」の研究会を、鹿児島から川野氏をお招きして 2014 年 2 月 13 日から 15 日に開催した。11 枚の図の担当ごとに川野氏を中心として検討した。2 月 22 日から 24 日まで、最終的な研究会を開催した。主に、「琉球進貢船図屏風」について担当者が作成した原案に対して、参加者全員で確認していった。その中で、近世の那覇における人々の生活について細かい議論が交わされ、それが絵引の中でも反映されることとなった。

## (4) 研究成果

3 年間の研究を通して、「八重山蔵元絵師画稿」「琉球進貢船図屏風」「琉球嶌真景」の研究会をのべ 8 回行い、その絵引を完成させることができた。成果物としては、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編として刊行することになる。

この研究に携わった研究者は、八重山の歴史・民俗の専門家である得能壽美氏、琉球近世史の専門家である田名真之氏、豊見山和行氏、真栄平房昭氏であり、それぞれの研究情報に加えて、「琉球進貢船図屏風」の解読を行ったことのある方々であり、かなり詳細な絵引を作成することができたのではないかと考えられる。さらに、錦絵研究者であり、今までの絵引作業の経験者である富澤達三氏から、技術面だけでなく、構成や索引作成など様々な点で力強い協力をいただいた。

このような方々を、琉球史の専門家である渡辺美季氏に取りまとめて頂いた。それはみごとな取りまとめで、そのおかげでこの成果が 3 年目の 2013 年度に終結することができた。それを補佐したのが、青山学院大学大学院生の本村育恵さんであった。

この奄美・沖縄の絵引研究では、このような最高のスタッフが集まり、その研究成果として密度の濃い絵引ができたと考えられる。その成果を基に、この研究を継続してさらに引き上げるために、次年度以降公開報告会を開催する予定である。そこでの成果の公開にも大いに期待がもてる。

## (5) 今後の課題と展望

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編では、「八重山蔵元絵師画稿」「琉球進貢船図屏風」「琉球嶌真景」の三つの絵画資料を対象にした。それぞれの絵には、奄美・沖縄における当時の庶民生活のあり様が、生き生きと描かれている。その一つ一つの名前を調べ、一枚一枚に解説をつけた。その作業の過程で、私たち研究グループで色々なことを情報交換し、話し合ってきた。そこで分かったことは、この絵引はこの研究の端緒にすぎないということだった。

この作業をしていく中で、様々な疑問が湧いてきた。個人的にも、例えば「琉球進貢船図屏風」に描かれた中国へ渡る琉球の船に揚げられる、むかで旗と七つ星旗は、中国の信仰とどのように関連しているのか興味深い。また、「琉球進貢船図屏風」だけでなく、「八重山蔵元絵師画稿」や「琉球嶌真景」に描かれている夥しい人それぞれに民俗学的な興味は尽きない。今後は、この絵引をテキストにしてさまざまな研究が可能だと思われる。とくに、歴史学と民俗学の共同研究に大いに期待がもてる。

当面、2014 年度に、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編の完成を記念して、研究報告会を計画している。1 回は、この絵引の対象地である沖縄で開催し、地元の方々へ成果報告するだけでなく、この

絵引を利用した地元での研究の発展を期待したい。もう１回は、神奈川大学での研究報告会を計画している。それは、従来の絵引と比較する事によって絵引研究の進展を議論していきたい。

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編は、近世における民衆の生活が視覚を通して理解できるだけでなく、その中で現代の民俗に繋がる部分も数多く見ることができる。奄美・琉球を対象にした歴史学と民俗学の協働によってこの絵引は完成することができたが、今後もこれを素材にした歴史学と民俗学の共同研究の進展に期待したい。

第１班Ｃ

# 『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究

## (1)　共同研究員名

研究班代表：鳥越輝昭

共同研究者：小松原由理　熊谷謙介　ステファン・ブッヘンベルゲル

## (2)　研究目的

18 世紀にヨーロッパ広域で描かれるようになった風俗画（広義）を資料として、都市民の生活を中心に社会史的・比較文化的視角から編集・解説を試みる予定である。今期末に 18 世紀ヨーロッパ（仏・独・伊・英語圏）に関する生活絵引（全２巻の予定）の第１巻を刊行する計画である。

## (3)　活動経過（鳥越）

非文字資料研究センター長から、ヨーロッパに関する「生活絵引」を編纂してほしいとの依頼を受けたのが 2011 年の冬だった。センターでは、すでに『日本近世生活絵引』と『東アジア生活絵引』とを刊行しており、今後は対象をヨーロッパにも拡大したいとのことだった。

少し考えたのち、新しい絵引編纂はつぎのような方針で進めることにした。

◆「ヨーロッパ」は、フランス語圏・ドイツ語圏・イタリア語圏・英語圏の範囲に留める。これらの地域が、社会的・文化的に近代ヨーロッパのなかで中心的位置を占めてきたからである。

◆絵引の素材には、同時代に描かれた「広義の風俗画（含版画）」を利用する。「広義の風俗画」とは、ねらいが風俗を描くことになくても、結果として風俗を描き出すことになった絵画、という意味である。

◆時代については、まず 18 世紀を取り扱う。理由は、それまで都市ヴェネツィアについて調べていた過程で、18 世紀の都市景観や都市民を描いた少なからぬ作品に出会っており、絵引の編纂に十分な資料が見つかるだろうし、資料は扱いに戸惑うほど多くないだろう、と推測したからである。

以上のような構想に基づいて、この共同研究に最適な方々に参加をお願いし、さいわい快くお引き受けいただくことができた。

この共同研究を遂行してきたメンバーとその専攻領域は、下記のとおりである（アイウエオ順）。

◆熊谷謙介　　フランス文学・表象文化論

◆小松原由理　　美学、前衛芸術思想史

◆ステファン・ブッヘンベルゲル　　比較文学、ドイツ文学、ミステリー小説・漫画の研究

◆鳥越輝昭　　比較文学・比較文化史

これらのメンバーが、つぎのように言語文化圏を担当してきた。

◆熊谷　　フランス語圏
◆小松原　　北ドイツ語圏
◆ブッヘンベルゲル　　南ドイツ語圏（含オーストリア）
◆鳥越　　イタリア語圏と英語圏

ブッヘンベルゲル氏には、共同研究開始の翌年（2012 年度）から参加いただいた。メンバーのこの増強は、ドイツ語圏を南北に二分し、南ドイツ語圏（南ドイツとオーストリア）を一括して取り扱う方がよいと考えたからである。

18 世紀ヨーロッパ都市生活絵引に関するこの共同研究は、2011 年度初めに開始され 2013 年度末に完了する予定のものである。研究の過程を略述する。

◆2011 年度は、18 世紀ヨーロッパの都市生活を描き出した図書資料（図版を載せるもの）を集めるのを主要目的にした。共同研究の出発時点では非文字資料研究センターに該当資料は皆無だったが、この 1 年間で、つぎの段階に進む手がかりとなる資料を集めることができた。
◆2012 年度には、図書資料の収集に加えて、熊谷・小松原・鳥越が、それぞれの担当地域に出張して資料の収集等をおこなった。
◆2013 年度は、絵引に使用する図版の絞り込み、およびその分析を主要目的として、共同研究を継続中である。また、この年度にはブッヘンベルゲルが担当地域に出張して資料の収集等をおこなった。

いずれの年度にも、年に 2 回ほど公式に研究会を開いたが、そのほかに非公式な話し合いを数回おこなった。

2014 年 1 月現在で、研究がどうなっているかについて略記しておく。

◆この生活絵引は、18 世紀ヨーロッパの代表的な都市の公空間を扱うことにした。公空間とは、市門、広場、街路、水辺のような場所である。
◆取り上げる都市は、パリ、ベルリン、ウィーン、ローマ、ヴェネツィア、ロンドンにほぼ定まった。
◆パリ、ローマ、ヴェネツィア、ロンドンについては、絵引に使用する図版がほぼ定まった。

上記 3 点に関連して少し補足しておく。

絵引の取り扱う対象を「都市」に定めたのは、ヨーロッパの社会的・文化的特徴が都市によく現れていると考えたからである。そして、代表的な都市の市門・広場・街路・水辺などの様子をヨーロッパ横断的に比較することにより、共通性と相違とが浮かび上がるのも興味深い。

絵引に取り上げる都市として、ナポリなども検討したが、取り上げないことにした。たとえばナポリの場合には、図版資料の利用が不便だからである。

一般にドイツ諸都市については、多数の都市景観図（そのなかに「風俗画」が含まれる）は見つか

らなかった。その点で、北ドイツを担当いただいた小松原氏と、南ドイツ・オーストリアを担当いただいたブッヘンベルゲル氏には苦労をおかけした。これは、出発時点でのわたくしの認識不足に起因している。しかし、これも共同研究の結果わかったことであるので、成果のひとつと強弁できるかもしれない。

研究の出発時には予想しなかった嬉しい誤算もあった。たとえばイタリアの都市景観図については、イタリア本国よりも、英国の大英博物館などでデジタルアーカイブ化がはるかに進んでおり、これにより共同研究が容易になった。フランスについても、カルナヴァレ美術館でパリ市を描いたさまざまな絵画がデジタルデータ化されており、共同研究を進める上で有益だった。

## (4) 研究成果

◆フランス語圏（熊谷）

「またもパリについての本！」19 世紀中盤に出版されたエドモン・テクシエ『タブロー・ド・パリ』の冒頭の言葉である。「19 世紀の首都」（ヴァルター・ベンヤミン）ことパリについては、19 世紀に限らず現在に至るまで最も多くのページが割かれてきた都市といっても過言ではない。汗牛充棟の感があるパリ研究に果たしてこれ以上付け加えるべきものがあるのか――、このような不安も感じつつも今回の共同研究に参加したのは、まずヴェネツィアやウィーンなどの都市表象との比較から新しい視点が提出できるのではという期待からであり（パリは単独で論じられることがほとんどである）、また都市景観図や風俗画を狭義の美術史的アプローチではなく、文化史的アプローチによって分析することには、私が本業とする文学研究・表象文化論からも貢献することがあるのではないかという想いからであった。

今回の分析対象である 18 世紀絵画、厳密に言えば 1789 年までの革命前の絵画については、膨大な数の都市景観図が存在している。しかし、日本で入手できた研究資料、また 2012 年 2 月のフランス渡航の折に収集したカタログ等（とりわけ Alfred Fierro et Jean-Yves Sarazin, *Le Paris des Lumières*: *D'après le plan de Turgot*（*1734-1739*), RMN, 2005（『啓蒙期のパリ』）と、Françoise Besse et Jérôme Godeau, *Tableaux parisiens*: *Du Moyen Age à nos jours, six siècles de peinture en capitale*, Parigramme, 2005（『タブロー・パリジャン』））を分析した結果、見えてきたのは、複数の研究に取り上げられている定番とも言うべき景観図があること、またその多くがカルナヴァレ美術館という、パリの歴史資料の多くを保有している美術館に所蔵されており、デジタル資料も多く備えているということであった。今回、ヨーロッパ生活絵引の第 1 巻ということもあり、比較的入手しやすく、分析も少なくない作品群の分析から始めるという方向性が決まった。

これを踏まえて、2013 年 3 月に非文字資料研究センターの予算で現地調査を行って都市風景の変遷を確認するとともに、資料の補足などを行った（「フランス都市風景の歴史的変遷を探る」ニューズレター『非文字資料研究』第 30 号、p. 16-17）。現在、「水辺」や「広場」といったテーマに沿って取り上げる対象を確定しており、より画質の精度の高い図版の利用ができるかどうか、カルナヴァレ美術館と交渉中である。

◆北ドイツ語圏（小松原）

18 世紀ドイツの人々の生活や暮らしが描かれた絵画作品を探し当てることは、当初想定していた以上に難しい作業となった。もちろん、南部ヨーロッパ、特にイタリア・ヴェネツィアを中心として当時流行したいわゆる都市景観図（Vedutismo）とその技術を持つ画家たちが、ドイツ北西の強国ドレスデン等に多数招かれており、他都市に遅れながらも見事に咲き誇ったその都市文化の繁栄を描かせ記録させたものは残されているわけで、なかでもベルナルド・ベロット（1721-80、「カナレット」とも呼称）が描いたドレスデンとその郊外の街並みであれば企画作品集は多く残されてはいた。しかし、それではすでに幾度も試みられた 18 世紀ドイツの視覚資料の再編集になりかねないという想いもあり、また新たにドイツ人画家によるドイツの都市景観図というものを使用したいという想いもあった。イタリア、フランスと比較し、そもそも素材となる資料の絶対数も少ないうえに、ドイツ人画家となると、日本において文献を見出すのも、画像を検索するのも限界があった。数少ないながらも、ある程度機能してくれたのは、マールブルク大学の画像アーカイヴのオンライン検索であり、これはキーワードに都市名や執筆年、画家名や所蔵先を入力するとオリジナルのコピー画像をダウンロードすることができた。ただし、そもそも所蔵先がわからない作品も多く、実際はある程度作品名が絞られてから所蔵先を見出すのに便利なサイトであるということが判明した。

そこで、2013 年 8 月に非文字資料研究センターの予算で現地調査に行かせていただいた結果、初めてある程度の感触を得ることができた。具体的に訪問したのはハンブルクとベルリンであり、ハンブルクでは特にハンブルク市歴史博物館における 18 世紀当時の人々の生活の再現模型と、衣装や小物などの展示は有効なビジョンを齎してくれた。他にも Diederich Lemkus and F. Ladomin による大型な 18 世紀のハンブルク都市図（City Prospect）からは、港町ハンブルクらしい最古の取引所をめぐる人々の具体的な取引の姿や積荷所でのやり取りの細部が描かれており、当時の北ドイツの豊かさを知る上で、重要な資料となった。そのうえで、独自な復興の歴史が極めて興味深く、しかしこれまであまり独立した企画として取り扱われることのなかった都市ベルリンに残された 18 世紀の画像資料の収集に努めた。滞在時にドイツ歴史博物館でフリードリッヒ大王展と文化フォーラムで風俗画家ダニエル・ホドヴィエツキー特別展が開催されていたのも幸運であった。今後は、収集した視覚資料や文献をもとに、18 世紀ベルリンの都市形成の過程とその記録としての絵画が有機的に結びつくような画像選定を急ぐつもりである。末尾ながら、20 世紀、21 世紀とさらに注目が集まる都市ベルリンに特化することで、さながら考古学的に新たな視点が得られるのではないかと期待している。

◆南ドイツ語圏（含オーストリア）（ブッヘンベルゲル）

ミュンヘン

ミュンヘンは 18 世紀にはまだ選帝侯の居城都市であり、大都市への変化は萌しただけであった。大都市化の加速は、ナポレオンの恩恵によりバイエルン王国の首都となる 1806 年を待たねばならなかった。このことにも原因があるのかもしれないが、18 世紀のひとびとの生活を調べることのできる、ミュンヘン市を描いた同時代の画像資料は比較的乏しいのである。18 世紀にはいまだに、絵画の眼目はなによりも宗教画にあったのだ。これは、バンベルクやレーゲンスブルクなど、他のバイエルンの都市にも当てはまる。市民生活を見ることのできるミュンヘン市のポートレートが増えるのは

19 世紀に入ってからである。

とはいえ、当時の傑出した都市景観画家、ベルナルド・ベロット（1721-80、「カナレット」とも呼称）は、ミュンヘンに滞在していた 1761 年に、ミュンヘン市の景色を 3 つ、すなわちニュンフェンブルク城の様子をふたつとイーザル川の右岸から市を観たパノラマをひとつ、絵にしている。

ミヒャエル・ヴェーニング（1645-1718）の銅版画は、ミュンヘン市の生活のありさまを実に詳細に見せてくれる。彼は 4 巻にわたる主著『バイエルンの歴史と地誌』（1710-26）で、ミュンヘンの 4 つの財務庁や、城や僧院などの建物も含めたブルクハウゼン、ランズフート、シュトラウビングなどの地のありさまを、およそ千もの銅版画に録したのみならず、景観図や戦闘図をも版画に刻した。ミュンヘン市自体の景色はそのうち 25 にのぼる。

ウィーン

同じ時代のウィーン市のポートレートは比較にならないほど多い。ハプスブルク帝国の首都として、18 世紀のウィーンはミュンヘンよりもはるかに重要であり、人口も多く、文明も進んでいたからである。特筆すべきは、ミュンヘンに旅する前の 1759 年から 1761 年の間にベロットが描いた 13 の景観図である。

ウィーンが都市として遂げた発展のありさまをとりわけよく伝えているのは、『居城都市ウィーン』に収められた、カール・シュッツ、ヨーハン・ツィーグラー、ラウレンツ・ヤンシャの 57 の手彩色銅版画（1779-98）である。これらの銅版画は、当時大いに人気を博した。

バロック時代のウィーンの様子は、言うまでもなく、もっと早くから銅版画に録されていた。例えばヨーゼフ・エマヌエル・フィッシャー、ヨーハン・アーダム・デルゼンバッハの手になる 1719 年の諸作品においては、当時の貴族文化が前面に出ている。以上 2 種類のコレクションにより、成熟した貴族社会からますます都市性を増してゆく社会へとウィーンが変遷するさまが、良く辿れるのである。

◆イタリア語圏と英語圏（鳥越）

わたくしは 18 世紀の英国文学を読むことから研究を始め、途中から近代の英仏独伊語圏に見られるヴェネツィアの表象史を研究し、近年になってローマの表象史も研究するようになった者である。したがって、共同研究開始以前から 18 世紀のヴェネツィアの景観図や風俗画にはかなり親しんでおり、ローマとロンドンについても多少の都市景観図や風俗画を見たことがあった。しかし、これらの都市生活の様子そのものを研究対象にしたのは、この共同研究が初めてで、そのこと自体が新鮮だった。

イタリアの都市生活を研究対象にするにあたって、当初、ローマ、ヴェネツィア、ナポリの 3 都市を候補にした。18 世紀のヴェネツィアについては、多数の「風俗画」（広義）が描かれたことを知っていたからであり、18 世紀のローマについても少なからぬ「風俗画」が描かれたことが推測できたからである。事実、その後の調査で、ヴェネツィアとローマは、18 世紀のイタリア都市のなかで、もっとも多数の都市景観図（そのなかに「風俗画」が含まれる）が描かれた都市であることが判明した。

ナポリは、当時イタリア最大の人口を持ち、古典文学の記憶との結びつきが豊かで、外観・生活そ

のものが魅力的な都市だったから、やはり多数の景観画が描かれた。しかし、残念ながら、ナポリに所蔵されているこれらの絵画も、「グランドツアー」の土産として英国に所蔵されるようになった絵画も、多くは個人蔵であり、美術館に所蔵されている場合にもほとんどデジタル化がなされていない。それゆえ、絵引の図版候補から外さざるをえなかった。

ヴェネツィアについては、カナレット（ジョヴァンニ・アントニオ・カナール、1697-1768）による多数の景観図が英国の王室コレクションや大英博物館に所蔵され、デジタル化されたかたちで利用可能であることが分かった。また、ガブリエル・ベッラ（1730-99）の多数の風俗画を所蔵するクエリーニ・スタンパリア博物館（ヴェネツィア）が、自由に写真撮影をさせてくれるほか、デジタル画像も利用させてくれるのが、ありがたい。

ローマについては、この時代の各所の光景を10巻230点に及ぶ版画に残したジュゼッペ・ヴァージ（1710-82）の作品集を、良質のリプリント版で入手できた。また、その弟子だったピラネージ（1720-78）が残したローマ景観画集も入手できた。

ヨーロッパの英語圏については、当初からロンドンに代表させることにしていた。ロンドンは、当時ヨーロッパ最大かつ最先端の都市で、世界の富の多くを吸収している興味深い場所だったからである。ロンドンについては、大英博物館とロンドン市博物館に所蔵されている「風俗画」のデジタル画像が利用可能なので、ありがたい。

上記の資料を中心に検討を加えて、ヴェネツィア、ローマ、ロンドンの3都市について、絵引に使用する「風俗画」をほぼ定めることができた。現在は、使用図版について解説・部分名称等の草稿を作成中である。

## (5)　今後の課題と展望（鳥越）

今後の課題は、18世紀ヨーロッパ（仏・独・伊・英語圏）に関する生活絵引を作成・刊行することである。

当初、この絵引は2013年度末の刊行を目指していたが、資料収集についても、具体的方法論の策定についても、いわば零からの出発だったので、結果として進行が遅れ、2014年度の刊行を目指し、目下、草稿の執筆に取りかかっている。

また当初は、18世紀ヨーロッパについて、屋外の公空間を取り扱う絵引に続いて、室内の私空間を取り扱う2巻目を編纂する計画を立てていた。しかし、調査の結果、ヴェネツィアを除くと、この面に関する十分な資料は入手できないことが判明したので、2巻目の編纂は取りやめることとした。

次期（2014年度～2016年度）には、18世紀のヨーロッパ生活絵引編纂に際して経験した資料の収集・分析の方法を生かしながら、19世紀前期（フランス革命～1870年頃）のヨーロッパについて、公空間を扱う「風俗画」資料を収集し、分析を加えて、絵引の刊行を目指したい。

「ヨーロッパ」の範囲は、今期とおなじく、フランス語圏、ドイツ語圏、イタリア語圏、英語圏を指すものとし、取り上げる都市としては、パリ、ベルリン、ミュンヘン、ウィーン、ローマ、ヴェネツィア、ロンドンなどを考えている。

使用予定の主な資料は、この時期に作成された絵画・版画のうち、それぞれの都市の建築物、広

場、街路、水辺、公園などを、そこに集まる人々とともに描き出している作品である。

建築物・広場・街路などの様子を、ヨーロッパ横断的に比較検討することにより、共通性と相違とを浮かび上がらせて、当時のヨーロッパの生活への洞察を得ることを期待している。

**第 2 班**

# 東アジアの租界とメディア空間

## (1)　共同研究員名

研究代表者：大里浩秋
共同研究者：内田青蔵　孫安石　村井寛志
研究協力者：吉川良和　金容範　栗原純　冨井正憲

## (2)　研究目的

中国・朝鮮における旧日本租界の歴史と現状を様々な角度から調査・研究してきた非文字資料研究センター第 1 期共同研究の取り組みを継続して行いつつ、戦前の中国・日本・朝鮮に設置された租界（租借地・鉄道附属地を含む）、居留地の比較研究を行う。また、租界が存在した同時期に中国・朝鮮で出版された日本語の新聞・雑誌等を取り上げることで、現地で形成された日本人のメディア空間の実態を明らかにしたい。

具体的には、租界で発行された画報――『良友』画報、『北洋画報』、『キング』、North China Daily Newspaper、『大陸新報』、『大東亜画報』などに掲載されている写真、図像資料の比較と検討を行う。

以上の内容について、関連資料の収集に努めながら、資料の読み合わせと外部の研究者を招いての研究会を適宜開くとともに、年に 1、2 回、中国か韓国および本学で公開研究会を行うことで、研究成果を学内外に広く伝え、かつ成果報告書を公刊する。

## (3)　活動経過

**○2011 年度**

第 1 回研究会（6 月 3 日）、顔合せ、年間計画確定

第 2 回研究会（7 月 1 日）、吉川良和報告「中国近代の演劇と図像資料――非文字資料研究への視座」

第 3 回研究会（7 月 22 日）、李培徳氏（香港大学香港人文社会研究所）報告「カレンダーの広告画から 1920～30 年代上海タバコ業界の競争を見る」、冨井正憲報告「『1930・京城』展覧会についての報告」

第 4 回研究会（2012 年 1 月 18 日）、斎藤多喜夫氏（元横浜開港資料館調査研究員）報告「居留地研究の現状と課題」

第 1 回公開研究会（12 月 16 日）、漢陽大学校東アジア文化研究所との共催

「京城の都市・建築そして生活」

報告 1、冨井正憲「モダン京城の都市と建築」

報告 2、車惠英氏（漢陽大学校）「植民地近代“京城”の内部探査」

報告 3、金容範「近代京城の都市韓屋とその暮らし」

第 2 回公開研究会（2012 年 2 月 25、26 日）、上海師範大学都市文化研究センター、ソウル市立大学都市人文研究所との共催

「都市のニューメディアと近代上海」国際シンポジウム、会場：上海師範大学

本学の報告者

冨井正憲「映像に描かれたアジアの都市研究 ── 清水宏監督の『京城』」

孫安石「上海での日本人の新聞雑誌の発行 ── 『上海新報』と『上海案内』を事例に」

大里浩秋「日本の租界研究動向について」

村井寛志「戦後上海と香港のメディア状況について」

内田青蔵「R. H. ブラントンによる横浜居留地の下水道整備について」

**○2012 年度**

第 1 回研究会（7 月 6 日）、栗原純報告「台湾の資料から見た大陸の租界、厦門を中心に」

第 2 回研究会（10 月 5 日）、金容範報告「植民地朝鮮の大地主と農場村 ── 熊本農場の遺跡調査を中心に」

第 3 回研究会（2013 年 1 月 11 日）

孫安石報告「上海租界と越界路の設定」

菊池敏夫氏（元神奈川大学付属高校教諭）報告「上海租界と百貨店研究について」

大里浩秋報告「台湾国史館の租界関係資料について」

第 1 回公開研究会（6 月 2 日）、「図像資料が語る近代中国のイメージ」

報告 1、ウィリアム・シャング氏（多摩大学）「イギリス人画家ウィリアム・アレグザンダーが演出した 18 世紀末期の中国」

報告 2、呉孟晋氏（京都国立博物館）「日本人外交官が収集した中国近代絵画 ── 京都国立博物館須磨コレクションについて」

報告 3、田島奈都子氏（姫路市立美術館）「戦前期の日本製ポスターに見られる中国イメージ」

**○2013 年度**

第 1 回研究会（5 月 24 日）

村井寛志報告「民国期上海メディアの香港における“転生” ── 戦中、戦後の『良友』画報から」

孫安石報告「韓国・国民大学中国人文社会研究所のシンポジウム『現代中国知識網絡的動力』の報告」

第 2 回研究会（7 月 25 日）

孫安石報告「上海の日本語新聞『上海新報』がみた中国』

橋本雄一氏（東京外国語大学）報告「大連の中国語新聞『泰東日報』と植民地都市のトポス」

木之内誠氏（首都大学東京）報告「大連の歴史地図の作成について」

第 3 回研究会（10 月 18 日）

大里浩秋報告「東亜同文会の資料中の租界関連記事」

孫安石報告「Legendary Sin Cities：Paris, Berlin and Shanghai の上海部分の検討」

第 4 回研究会（12 月 18 日）

近藤恒弘氏（天津関連資料寄贈者）報告「天津の絵葉書について」

内田青蔵報告「横浜居留地のメインストリート日本大通りの成立過程について ── 幕末から震災復興期まで」

第 1 回公開研究会（5 月 29、30 日、6 月 1 日）、ソウル市立大学都市人文学研究所、上海師範大学都市文化研究センターとの共催、「アジア都市研究：回顧と展望」国際シンポジウム、会場：ソウル市立大学国際会議場

本学の報告者

大里浩秋「非文字資料研究センターがめざす研究 ── 付、台湾 2 機関の租界関連資料」

孫安石「上海の日本語新聞『上海日報』が見た上海と日本」

第 3 回公開研究会（2014 年 2 月 15 日）、「東アジアの租界・居留地とメディア」

報告者

大里浩秋「東亜同文会資料中の租界関連情報」

木之内誠氏「大連の歴史地図の作成について」

近藤恒弘氏「天津関係の絵はがきについて」

毛利康秀氏（日本大学）「絵葉書から読み解くハルビンと日本人 ── ハルビン絵葉書の社会的意味」

彭国躍氏（神奈川大学）「従軍画家たちが描いた戦時中の上海 ── 軍事郵便絵葉書による図版検証」

蘇智良氏（上海師範大学）「上海人文歴史地図の制作構想について」（論文提出）

李衛東氏（江漢大学）「租借と武漢の都市空間・機能の変容」

内田青蔵「横浜居留地の建築について」

斎藤多喜夫氏「横浜の外国人居留地 ── 上海租界との比較を念頭に」（当日の大雪で欠席）

金承郁氏（ソウル市立大学）「上海韓人の国際認識」

金済正氏（ソウル市立大学）「ソウルの外国人居留地の形成について」

- 第 6 回全国外国人居留地研究会築地大会（11 月 2 日）、会場：聖路加看護大学に参加、他に、横浜居留地研究会に参加
- 韓国木浦大学開催シンポジウム（11 月 21、22 日）に、内田青蔵、金容範参加
- 韓国漢陽大学開催シンポジウム（2014 年 3 月 28、29 日）に佐野賢治氏参加

## (4)　研究成果

上記（3）に並べたような研究活動を 3 年間継続してきて、おおむねタイトル「東アジアの租界とメディア空間」に沿った内容で各人の研究報告を行い、それに基づく討論を行って、大分共通認識を得ることが出来たと感じる。また、上海師範大学とソウル市立大学の研究者との 3 度にわたるシンポジウムを開催、さらに韓国の漢陽大学と研究交流の関係を結び、木浦大学の研究会にも参加することで、国内の研究者に止まらない協力関係がこの間に生まれた。もう 1 つ、横浜居留地研究会とのつながりで、日本における外国人居留地研究の一角に参加することが出来た。

以上のような研究の蓄積や外とのつながりを目立つ形の成果として公にすることは未だ不十分のままで3年間の活動を終えることになったのは遺憾であるが、それらを次の3年の活動に生かし発展させることで、明らかにしたいと考えている。

## (5) 今後の課題と展望

2014年度からは、「中国・朝鮮の旧日本租界――現況調査と現地で発行された出版物の分析」のタイトルで再スタートする。上の（4）で述べたことであるが、これまで積み上げてきたものを確認して、その作業を継続するとともに、租界研究でやり残してきた現況調査や資料の分析を着実に行うことで、租界研究の一応の総まとめになるような成果報告書をまとめて、世に問いたいものだと願っている。